

19年来日、コロナ禍に阻まれ続けた夢

最初で最後の 本番へ

豪出身ALT ロイーエンさん

八戸三社大祭 鼓動、再び

2019年8月2日。八戸学院光星高の外国語指導助手(ALT)となるため来日、八戸市に赴任したエティエン・ヴァン・ロイーエンさん(26)は、八戸三社大祭の山車の夜間運行に案内され、その熱気に圧倒された。「次は自分も参加したい」と抱いた希望はしかし、予期せぬ新型コロナウイルス禍に阻まれ続けてきた。任期を終える今年になって祭りの通常開催が決まり、ようやく山車制作に携わることができた。任期期限となる7月31日の前夜祭で、最初で最後の本番を体験し、八戸を離れる予定だ。(井上周平)



エティエン・ヴァン・ロイーエンさん。「格好良いですか?」と共に、自ら制作に携わった竜の飾りを見上げる。6月27日、八戸市の長者まつりぐら広場

山車制作参加、前夜祭が任期期限

「忘れられない日になる」

豪ゴールドコースト市出身。日本文化に関心を持ち、大学で日本語研究を専攻。さらに学びを深めるため、ALTに応募した。19年に撮影した夜間運行の画像は、今もスマートフォンに保存してある。古き良き伝統を感じさせるお囃子に、大掛かりで壮麗な山車飾り。きつと、お金持ちが名人たちに制作を依頼しているに違いない。故郷ではクリスマスやスポーツイベントなど現代的な催しが多かっただけに、三社大祭参加への夢は膨らんだ。任期当初は教員生活の傍ら、地元のアイスホッケーチームスタッフに加入したり、友人と国内各地を旅行したりと、日本での生活を満喫した。だが程なく、新型コロナウイルスの脅威が八戸にも波及。遠出がままならず、3密に配慮した授業で生徒と思うような交流ができない上、日本語の勉強にも身が入らなくなり、歯がゆい日々を過ごしていた。祭りの通常開催を教えてください。ダックス代表の千田徹さん(72)。十六日町山車組のメンバーでもあり、八戸た。での思い出づくりにと、山車制作体験を持ちかけた。「ぜひ参加させてほしい。思いがけない形で、忘れかけていた夢がかなうことになった。5月にまつりぐら広場の山車小屋に案内されると、雑然とした内部の様子を夢中で撮影した。「祭り本番に参加した外国人は多いだろうけれど、メイキングシーンを知る人は珍しいはず。本当に貴重な経験だ」。山車制作が市民有志の寄付とボランティアで成り立っていることも、この時に初めて知った。信じられなかった。山車飾りでは、竜の頭や梅の花、松などの制作を体験。クラブワークが得意なわけではなかったが、発泡スチロール製の複雑な竜のひげや目、鼻をこしらえた。「不器用だけど、とても真剣に作っていたよ」と千田さんは目を細める。前夜祭までには、大太鼓も練習しておきたいと考えている。4年間の八戸暮らしで、たった1日だけの本番参加となるが、「きつと忘れられない日になる」と胸を高鳴らせながら、山車制作責任者の小回正人さん(60)も「せつかくの機会を存分に楽しんでほしい」とエールを送る。将来は母国で、日本の観光地を紹介するライターになりたいという。「もちろん、最初に書きたいのは三社大祭だよ」と、新たな夢を膨らませた。